
とある吹奏楽部にて。

真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある吹奏楽部にて。

【著者】

Z8265Z

【作者名】

真白

【あらすじ】

平凡な男子高校生と、とある吹奏楽部員のお話。

吹奏楽部。

大半の人が、大人しくて運動部よりも少し影の薄い、でも時には運動部なみに走りこんだりもする、縁の下の力持ち的な、真面目なイメージを持つだろう。

少なくとも僕はそうだった。

うちの学校の吹奏楽部は、何かと美形が多い。学校中の可愛い子達が集まっているんじやないかってくらい、美人だらけなのだ。

そんなわけで、当然ながら我が校吹奏楽部は、男子から絶大な人気があり、部活の時間は音楽室を覗きに行く輩も少なくはないわけだ。

でも、わざわざ覗きに行くのではなくて、もう一つそ入部してしまえば、小さな窓から眺めるよりも間近で部員たちを拝めるではないか、と思つ人がいるかもしれない。

……ここで男子達も頭をかかえる大きな問題が一つ。

この吹奏楽部、実は男子の入部を固くお断りする、いわゆる男子禁制の部なのだった。

ふわあ、と大きなあぐびを1つつぐ。

僕こと竜胆嵐りんとうあらしは今、非常に退屈しているのである。

珍しく部活も早く終わり、やることがない。

一緒に帰っている友達を待つていても、早くてあと2時間後で、時間があまりすぎている。

じつとしているのもつまらないし、何か面白い退屈しきはないと、意味もなく廊下をぶらついているところであった。

うちの高校は、部活の数が豊富である。

特に文化部は伝統のあるものばかりで、けっこう見ていて面白い。中には和太鼓部、なんてのもあって、お祭りの季節でもないのに、ドンドコドンドコ年中無休でやっていたりもする。

そんな個性的な部活を遠目に眺め、音楽室の前を通り過ぎようとしました時。

「うわっ！？」

どたーん、と盛大な音をたててコケた。

なんだ！？

足元にひらりと落ちる、なにやら白い紙。

僕はどうやらそれにつまずいたらしい。

五線譜が書いてあるのを見ると、これは楽譜だらうか？

僕には到底理解できない、音符だの休符だの、意味不明な記号の羅列のオンパレード。

題名は、ラプソディー・イン・ブルー。

パートはテナーサックス。

ああ、吹奏楽部か。

テナーサックスなんて、特に目立った楽器じゃないし、サックスといえばアルトサックスの方がメジャーなわけで、僕はテナーサックスを吹いている生徒なんて知らない。

フルートやトランペットなら、文化祭でソロをやつたりと、わりと活躍していて、頗くくらいは分かるのだが。

でも落し物を拾つた以上、そのままにしておく訳にもいかないし、持ち主に届けてやる義務がある。

ま、いいか。

吹部の人可愛いし。

たしか、吹奏楽部は合奏の時以外、使っていない教室を借りてパート練習を行つていたはず。

だいぶ前に、サックスパートは1年5組だと、覗き常習犯の変態友達が言つていた氣もするし。

とりあえず、もと来た廊下を引き返し、1年5組を目指すことにして

しょ。

「すいませーん」
たたたつたらつたたー、と冒頭部分を吹いていたサックスの音が
ピタ、と止んだ。

男子禁制の部といふこともあり、女の子だけでいるところ、いきなりドアを開けるのはどうかと思つたので、ドアは閉まつたまま声だけかけてみた。

「楽譜落ちてたんですけどー、テナーサックスってこいですよね？」
「はあ！？ 何なのあんた、さつさと渡せつつの！」
ガララララララララ、ととんでもなく大きな音をたてて、そしてまた、とんでもなくかい声をあげて出てきた小さな女の子。
びっくりした。

黒髪ぱつつん、耳の下あたりで二つ結びと、大人しそうな子なのに、どこからそんな馬鹿でかい声が出てくるんだ。

「のろいんだつてば！ はいはい、ありがとーございまし」
ひつたくるうとした彼女の手が、言葉と共に固まつた。
そして、僕の顔を凝視しながら、間の抜けたような声で。

「あれ……？ なんで、嵐……？」

初対面で名前呼び、とはこっちの方がびっくりだ。

ていうか、こいつ誰？

とくに目立つこともない、僕の名前を知つている人なんて限られて
いるし、僕に親しい女の子なんていたどうか。

そこで僕は初めて、ぱつつん女の顔を正面から見つめた。

僕を見つめ返してくる目は、黒目がちで大きくて、丸顔で、美人
というよりは、愛嬌のある可愛い顔をしている。

まったくもつて見覚えがない。

僕が首をかしげていると、ぱつつん女はちょっと機嫌が悪くなつたようだつた。

「覚えてないんだー、4年くらい前だしねー」

てことは、中1の頃……？

僕の中学校の思い出といえば、3年間ずっと担任が同じ人だったこと、仲の良かった友達が引っ越してしまったこと、好きな人にふられたこと……

思い出したくない」とばかりだ。

「ああごめん、用事があるからまたな」

僕はそういうてはぐらかし、今日のことは忘れようと思つた。

吹奏楽部は、大人しくて可愛い子だけがいるわけじゃなかつた、といふこと以外。

あのぱつつん女のことなんて、すっかり綺麗に忘れ去つたある日のことだつた。

日直だから、という理由で先生にパシられた僕は、2年4組の教室へ向かつていた。

「ごめんね、竜胆くん！ 先生これから会議だから、このプリント4組もつてといて！」

とかなんとか言つて、僕にとんでもない量のプリントの束を渡してきやがつた。

いいんだけどさ、どうせ暇だし。

まだ、教室にはちらほら人が残つている。

窓の外を眺めるカッフルだつたり、友達としゃべつてゐる女子達だつたり。

人がいる中で他教室にプリントを持って入るのは、少し気が引けるけど、頼まれた以上はしかたない。

さつさと済ませて、出てくるとしよう。

カラカラ、と小さな音を立てて前のドアを開ける。

「……っ

僕は信じがたいものを見た。

夕日で真っ赤に染まつた教室で一人、窓の外を眺める女の子。入つてくる風で髪がこぼれ、さらさらと舞うその姿は、僕は見覚えがあった。

中学生にあがつて間もない頃、僕に恋人ができた。死ぬ思いで想いを伝え、やつと叶つたはずなのに。

彼女は、2年生にあがる少し前に、親の転勤で引っ越してしまつたのだ。

寂しくて、悲しくて、忘れ去ることでしか悲しみを癒せなかつた僕は、彼女と過ごした1年間、無かつた事にして過ごしてきた。

5年前、中学1年生だった僕は、放課後の教室で、真っ赤に染まつた夕日を背中に、彼女に告白した。

今の状況は、あまりにもその時にそつくりで、まるで時間が止まつたかのように、僕はその後ろ姿から日が離せなかつた。

「杏里……？」

思わずつぶやいた言葉は、もつもとには戻らない。ゆつくじと、その女の子は振り向いた。

「嵐

下を向いたまま、僕の名前を呼ぶ。

そして。

「やつと、思い出した？」

「え？」

がばつと顔をあげたその子は、

「ぱつつん女！？」

大きな目、丸い顔、桃色の小さな唇。

まぎれもなく、あのぱつつん女なのに、思い出してしまつた僕はどこか杏里の面影がある気がして、顔を凝視してしまつ。

「髪伸ばしたからつて、メイクしてるからつて、背伸びたからつて、忘れてんじやないわよ！」

強い口調のくせに、涙をためて僕を見上げる、生意気で、愛らしい顔。

そうだ。

引っ越す前日、見送りにきた僕を、杏里は今のように見上げていた。
まだ肩までしかなかつた髪を、おかっぱくらこまで短くして、
「髪、のびたら逢いに行ってやるからなー。」
と、強がりまくつて背中をむけた杏里。

「おまえ、約束覚えてたのか」

「めん杏里、思い出したよ。

杏里はこんなに可愛くなつて、髪も綺麗に伸ばして、マイクも覚えたのに、僕は何も変わなかつたよ。

「めん杏里、おかえり」

プリンントを机に置き、僕は両手を広げる。

「馬鹿」

毒づきながらも、僕の胸にすっぽと収まる杏里は、最高に可愛い。
前言撤回、やつぱり吹奏楽部は、可愛い子の集まりなかもしれない。

(後書き)

最初、ノメテイを書い「う」と思つてました
無理だつたので、恋愛にしました（え
まあ、ラノベっぽい恋愛になつてればいいな、
読んでくれた皆さん、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8265n/>

とある吹奏楽部にて。

2010年10月8日22時46分発行